名張ゆめづくり協働塾～防災ワークショップ～

風水害・地震から身を守る

（1）プラス防災

普段の地域づくり活動を
防災・減災につなげるには

2018年12月26日

（特活）NPO政策研究所専務理事

相川康子

今日のワークショップの狙い

■防災・減災を、新たな視点で問い直す

⇒防災のイメージを変えてみよう！

- （発災当日の対応は重要だが）発災前や発災後の取り組みにも注目する
- 多くの人を巻き込む方策（当事者性を高める）方策を考える
- 「防災と言わない防災」のアイディアを練る

普段の生活や地域づくり活動にひと工夫

（プラス防災）

無理なく楽しく続けるアイディア出し

皆さんの防災のイメージカラーは？
「防災」と聞いて思い浮かぶ色は？

一般住民の「防災」のイメージって・・・

怖いから、あまり考えたくないな。

このあたりは昔から災害なんて無縁の安全な地域だよ

災害が起きても行政や地域の役員さんが、何とかしてくれるんじゃないの？

いま、考えても仕方ない。いざという時に考えればいいや。

私が生きている間は大丈夫なんじゃないかな

なんだか、難しそう・・・

高額な耐震化する蓄えも気力も無いから、諦めているの。

とりあえず避難所にいけば、必要なものは揃っているよね。

あまり知られていない事実

- 庁舎や病院などの公共施設も被害に遭い、職員や消防･警察の署員、自治会長や民生児童委員ら「まちのお世話役」の人も被災する

  ⇒いざという時、あてにできない恐れがある

- 阪神･淡路大震災では、生き埋めの人（約3.5万人）の8割近くは、近隣住民が救出した

  ⇒日頃の近隣関係（面識社会）と、機材･備品等の備えが重要

- 当日、助かっても、その後の過労や環境悪化で亡くなる**「災害関連死」が続出**している

  阪神･淡路大震災で919人（**兵庫県の10年検証　14.4%**）
  東日本大震災では3,676人、うち1ヶ月以内は1,212人
  （**復興庁調べ、2018年3月末時点**）
  熊本地震では、直接死50人に対して、関連死が4倍以上

※一時（いっとき）避難所に連れだって逃げるだけが「災害対応」ではない

考える視点①災害は想定外に起きる

- 平日の日中など、家族がバラバラ、地域に女性や高齢者しかいない時間に起きたら？　*←東日本大震災*

  今のままの「防災訓練」で大丈夫なの？

  男性が「仕切り役」
  女性は「炊き出し」「救護」
  お年寄りや子どもは「守るべき（何もできない）存在」

- 災害はその時々で様相が異なり、逃げ方も異なる

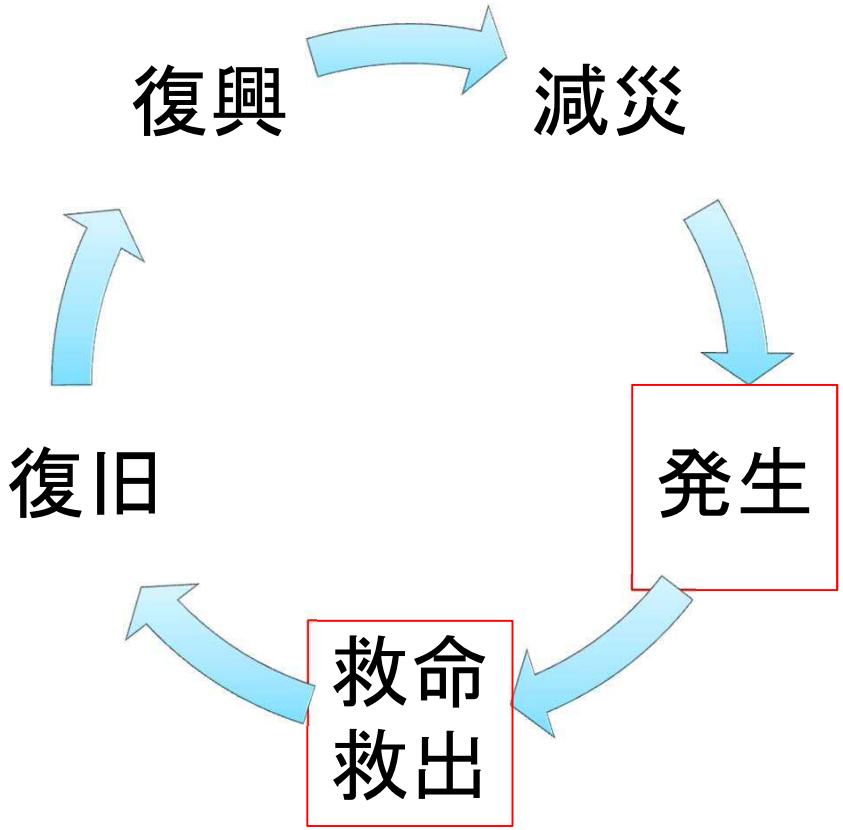
  過去の事例に基づくマニュアルが役に立たないこともある

※マニュアルは大事。でも、とらわれ過ぎないことが大事

⇒各自の対応力（自助）を高める重要性

指示待ち人間やマニュアル至上主義者をつくるのが目的ではない

考える視点②長いスパンで考えよう



「発生」と初期の「救命・救出」だけが注目されがちだが…

一連のプロセスを考えれば、老若男女みんなの主体的な参画が不可欠！

どうやって「当事者性」を高めるかが課題

地域防災に求められていること

防災を暮らしの中に根付かせる

災害はいつ起きるか分からない

- 災害時は普段やり慣れていることしかできない
  特別な日に特別な訓練で行うのも大事だが、
  「暮らし」の中に組み込むことで根付かせる
- 災害の種別、発生時期によって避難の仕方も違う
  ⇒住民一人ひとりの防災力の強化（自助）
  ⇒地域の防災力の強化（共助）
- 発災当日だけでなく、その前後も含めてトータルに対応する（取り残される人や関連死を出さない）

地域にできる「命を守る」行動とは

発災前

面識社会をつくる

○取り残されそうな人（脆弱性の高い人）の把握

○日常的なケア （声掛け、交流行事など）

発災当日

安全な場所へ逃げる

○自分（＋家族）の身の安全を確保

○避難行動要支援者への対応、安否確認

○地区の救助活動

発災後

災害関連死を出さない

○地域のローラー点検

○避難先での要援護者（要配慮者）のケア

○復旧に向けた取組

連続して（分断なく）取り組めるのは地域コミュニティだけ

地域防災の訓練や体制の現状は？

■発災当日の対応だけに偏りがち

例えば、地域の防災訓練・避難訓練は

あらかじめ予告し、休日に行われることが多い

古い性別役割分業（男性が仕切り、女性は炊き出しか救護）

⇒平日の日中に起きた際はどうなる？

⇒災害関連死を防ぐことはできる？

■地縁組織と行政だけの連携にとどまる

組織内でも担当者任せ？

■行政の防災部局や消防、地域の自主防災組織は、健康な男性ばかり

⇒熱心で善意にあふれた人達だが・・・同じような立場・性別の人だけだと、どうしても気づかないことがある

※多様な視点で点検し、現行の「穴」に気付き、事前・事後の対応も含めた総合的な取組にする必要がある

見落とされがちな課題

- 家族や世帯の変化、子育て・介護環境の変化
  - 単身世帯や一人親世帯が急増している
- 地域コミュニティのセーフティネット機能の低下
  - さまざまな問題を抱えた人（心身の障がい、経済問題、家族とのトラブル、社会的排除等）が潜在化している
- 女性やマイノリティーに特有の困りごとやニーズ
  - 身体や心のトラブル
  - 家事・育児等の負担増大、仕事と家庭責任との板挟み
  - 高齢者、子ども、障がい者、外国人に必要なケア
- 公的避難所に行かない・行けない人の存在
- 避難生活上の諸課題
  - 在宅避難や指定避難場所以外の避難者も含めて

災害にも強いまち、とは

- 住民同士の関係が良好で、分断や差別のない地域
  - 近所づきあい、諸団体のネットワーク
  - 女性や新参者も含め、誰もが声をあげられる風通しの良さ
- 住民の姿勢
  - 地域への愛着・貢献
  - 災害リスクの把握・周知
  - 外部に対しても開放的（支援者の受入）
- 環境整備
  - 周囲の里山や水路がよく管理されている
  - 内外との連絡手段が複数ある

※旧来の性別役割分担意識に、とらわれない
※たくさんのネットワークを張り巡らせる
※怖がらせるだけでなく「楽しく持続できること」を探す

＜なぞなぞ＞のようですが･･･
「防災」といわない防災を考える

- 地域福祉のアプローチ
  要援護者になりそうな人の把握、声がけ
  複数の見守り体制、防犯との連携
- 環境保全のアプローチ
  緑化、雨水利用、井戸や水路の保全
- 生涯学習からのアプローチ
  郷土の災害史、地名や建築の再発見、マップ作成
- 青少年育成からのアプローチ
  楽しみながらのサバイバル訓練
- 地域連携からのアプローチ
  都市農村交流や姉妹都市提携に災害相互協力協定を入れておく

普段の取り組みで、応用できそうなことは？
老若男女で、楽しく取り組めそうなことは？

考えてみましょう
ワークショップの進め方①

（1）まずは短く自己紹介をし、進行役を決める

　　1人30秒以内×6人＋進行役選出

（2）模造紙の枠組みを眺め、まずは個人で「プラス防災」できそうなこと（今の活動に防災の要素を足してできること）を考え、付箋に記入する

　（各分野少なくとも2枚ずつ。多いほど良い）

（3）進行役の声がけで付箋を貼りだし、全体の傾向をみる。同じようなアイディアをまとめ、新しいアイディアが出たら追加する。

ワークショップの進め方②

（4）これは！と思うアイディアを1つ選んで、
　深掘りをする＋イメージカラーを決める
　　対象、担い手、事業の詳細、工夫・・・
（5）A3の紙に清書後、グループ発表
　　（アイディアの披露）
（6）投票（班ごとに説明者を1～2人残して（交替制）他のグループの模造紙や見に行き、いいなと思ったものにシールを貼る）
（7）まとめ、講評

どうすれば地域で多様な知恵やアイディアを出し合える？

- アウトリーチ（出かけていく）による現状把握
- 自由に話し合える場の設定

  時間帯や雰囲気を変えて・・・「防災カフェ」

  人が集まるところで出前トーク＋ワークショップ
- 防災の日常化（防災と言わない防災）の工夫

  アイディアコンテスト、講習会なども
- 地域づくり組織の活動に＜プラス防災＞を！

皆で知恵を出し合いましょう！